しあわせのカブトムシ

ピコは、木につかまっているカブトムシを見つけました。カブトムシは、幸せをよぶ虫とカエルの仲間ではいわれています。ピコはとてもよろこびました。そして、いいことを思いつきました。

「このカブトムシをつかまえて、病気のおじさんのところにつれていこう。きっと病気がよくなるにちがいない」

　しかし、カブトムシをつかまえるのは大変です。カブトムシの足はするどくて、カエルのひふをやぶってしまうのです。カブトムシをつかまえようとして、命をおとしてしまった仲間もいます。ピコはかんがえました。そして、思いつきました。

「ヘチマのつるをもってきて、あのツノにひっかけよう」

　ピコはつるをもって、カブトムシに近づきました。そして、じっとしているカブトムシのツノにうまくしばりました。

　ピコはカブトムシを木からひっぱっておろし、ゆっくりと歩きました。カブトムシは、のそのそとピコの後をついていきます。
　ピコはカブトムシをつれていると、なんだか幸せになっていくような気がしました。ピコはとくいげに前にすすみました。

ピコが歩いていると、なにかをかぶり、虫取りあみをもったカエルに出会いました。カエルはその上から目をだしていました。ピコはふしぎに思っていいました。
「なにをかぶっているの？」
「ぼうしだよ。ぼくはひふが弱いんだ。こんなつよい陽ざしじゃやけどしてしまうよ。きみはだいじょうぶなの？」
「うん。ぼくはぜんぜんへいきだよ」
「ぼくのおばあさんが、むかしよくいってたんだ。夏の陽ざしは体をとかしてしまうんだって。毎年夏の光をあびていると、１０年後にはとけて、ドロにみたいになってしまうらしいよ。１０年後、そうなりたくないから、今からぼうしをかぶっているんだ」
　ピコはやっぱりふしぎに思って、ぼうしをじろじろと見ました。そして、１０年後には自分はとけてなくなってしまうかもしれない……としんけんに思いました。
「これから、カをたいじしにいくんだ。血をすうカは、あくまの虫だからね。おばあさんがそういってたんだ。じゃあね」
　カエルはそういうと、いってしまいました。

しばらく歩いていると、木のえだに足をひっかけてさかさまになっているカエルがいました。カエルはさかさまになりながら、うでをくんでいます。なにやら考え事をしているようです。ピコはたちどまってききました。

「そんなところでなにをしているんだい？」

すると、カエルはさかさまのままこたえました。

「はじめは木のえだにこしかけていたんだ。だけど、うっかりすべって、こんなになってしまったんだよ。今、どうやっておりようか考えているところ」

「はしごをもってきてあげるよ」

「いや、いいよ。どうせ、いつかつかれておっこっちゃうんだから」

カエルはそういって、うでぐみをしたままです。

「あ、カブトムシつれてるんだね。いいことありそうだ」

カエルはさかさまのまま、にっこりとわらいました。

　だんだんあたりは暗くなってきました。
　ピコとカブトムシは、林の中をまっすぐ歩きました。上を見あげると、木々の間から星が見えます。星は、まるで宝石のようにかがやいています。
「なんてきれいなんだろう。宝物を見つけたような気がするよ」
　ピコはため息をつきました。
　あたりはとてもしずかで、なにも音がきこえません。ピコは、ほんのすこしだけねむくなってきました。

小さな池のほとりにでました。あたりはしんとしていました。ピコが池のまんなかあたりを見ると、黄色いような白いような光がかがやいているのを見つけました。ピコがそれをじっと見ていると、池から声がきこえてきました。
「おおい、流れ星をつかまえたんだ。すごいだろう？」
「毎年、ここで流れ星をつかまえるのをねらってたんだ。今年、やっとつかまえられたよ」
「その星をどうするんだい？」
星の光が、だんだんピコに近づいてきました。
「星をくだいて、でんとうにするよ。あちこちにおくんだ。夜の森もこれでこわくないよ」
星をもったカエルの顔がようやく見えました。
「これで、夜道もあぶなくないね」
ピコはいいました。

　ピコは、池のほとりの木のくいにカブトムシをつなぎました。一日歩きつづけたせいか、くたくたでとてもねむくなってしまいました。ピコは池にはいり、ういているスイレンの葉の上に頭と足をのせ、横になりました。空にかがやいている小さな星を見ているうちに、すぐにねむりにおちていきました。
　池の水面はしずまりかえり、星だけがまたたいています。夜はすっかりふけていきました。

　その夜、ピコはカブトムシを見て元気になったおじさんの夢をみました。おじさんのえがおが頭にうかんできます。元気になったおじさんのすがたがうかぶたびに、うれしくてしかたがありませんでした。

　朝の光にピコは気づきました。体のつかれもすっかりとれ、早くおじさんのところにいこうと思いました。しかし、カブトムシのすがたは見あたりません。ヘチマのつるがあるだけです。ピコはびっくりして、あたりを見まわしましたが、カブトムシを見つけることができません。
「なんてこったい！　どこへいってしまったんだ！」
　ピコは大声でさけびました。
　そして、かなしくなってボロボロとなみだをこぼしました。いくらないても、カブトムシのすがたはありません。

　幸せだった心は、一気につきおとされてしまったようでした。幸せをよぶカブトムシは、とつぜん心を不幸にしてしまう虫でもあったのです。
　ピコはすわりこみました。カブトムシをつかまえなければよかったと思いました。これでおじさんの病気はよくならないのだ。ピコの大きなきたいはこわれ、むねのあたりがキュッといたくなりました。ピコはとほうにくれました。しかし、ここでじっとしているわけにもいきません。しかたなく、歩きはじめました。

　ピコは、道ばたにさいているアサガオを見つけました。ピンクやむらさき色をしたアサガオの花は大きく開き、こちらを見てわらっているように見えました。
　そうだ、このアサガオをつんで、おじさんのところにもっていこう。カブトムシの代わりに、このきれいなアサガオをプレゼントしよう。おじさんは、きっとよろこんでくれるにちがいない。
　ピコは気をとりなおして、アサガオの花をつみ、かたにかつぎました。そして、早足でおじさんの家に向かいました。

　ようやく、おじさんの家につきました。
「おじさん、ちょうしはどう？」
　すると、おじさんはベッドからおき上がり、いいました。
「ピコくん、いいところにきてくれた！　見ておくれ、カブトムシだよ！　カブトムシがわしのところにとんできてくれたんだよ！　わしは幸せ者だ！　なんて幸せなんだろう！」
　ピコはびっくりしました。あのカブトムシが先回りをして、おじさんのところに来ていたなんて。
「これで病気もよくなるような気がするよ。いや、ぜったいによくなる！」
「そうだね、なんていったって、カブトムシは幸せをよぶ虫だから！」
　ピコには、おじさんのえがおがまぶしくうつりました。そしてまた、みたされた気持ちになりました。
　気がつくと、かたにかついでいたアサガオはしおれていました。

　もうお昼になっていたのです。

おわり